慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリザベス・ヤング=ブリュエール著『ハンナ・アレント：世界への愛』
Sub Title	Elisabeth Young-Bruehl, "Hannah Arendt : for love of the world"
Author	寺島, 俊穂(Terajima, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1984
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.57, No.2 (1984. 2) ,p.111- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19840228-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Elisabeth Young-Bruehl,
Hannah Arendt : For Love of the World
New Heaven and London : Yale University Press, 1982,
xxv＋563 pp.

エリザベス・ヤング＝ブリュエール著
『ハンナ・アレント――世界への愛』

ハンナ・アレントにとってあらゆる多様性を具えた人びとから構成される世界は、何よりも価値のあるものだった。アレントは、友人のワルデマール・グリアンについての評伝を、「かれが世を去ったとき、かれの友人たちは、家族の一員がかれらをあとに残して去ってしまったかのように、かれのために嘆き悲んだのである。かれは、われわれのすべてが達成すべきことをし達成した。すなわち、かれはかれの本拠をこの世界のなかに築き、友情を通じてこの地上をかれ自身にもくつろげるところとしたのである」（阿部斉訳『暗い時代の人々』河出書房新社、一九七二年、三二〇頁）と結んでいるが、私はこのことが彼女自身の場合にも当てはまるのではないだろうかという気がしてならなかった。というのも、アレント自身の著作から読みとることができるのは交友関係、多様な人間のつくり出す関係への積極的な評価だからである。そして、エリザベス・ヤング＝ブリュエールの著した詳細な伝記『ハンナ・アレント――世界への愛』を読んで最初に受けた印象は、まさにこのことが確認されたという思いだった。

ヤング＝ブリュエールは序文のなかで「ハンス・ヨナスが葬儀で述べたように、ハンナ・アレントには〈友情の天才的才能〉があった。彼女自身のことばでいえば、彼女を動かしたのは友情への愛（Eros der Freundschaft）であった。彼女は自分の交友関係を人生の中心にあるものとみなした」（p.xii）と指摘している。また、「ハンナ・アレントは友情に恵まれていた。この伝記を書いたとき、私もまた彼女の交友関係の恩恵を得た」（p.xxiii）という謝辞に示されるように、この伝記自体数十人にのぼるアレントの友人の協力を得て初めて成し得た仕事である。ヤング＝ブリュエールは、マールバッハのシラー博物館、ワシントンのアメリカ議会図書館に所蔵されているArendt Papers、友人の所持する書簡、友人、親類からの聞き取りに依拠してアレントの私的側面に詳細な光を当てているが、そのこと自体ニュースクール・フォア・ソーシャル・リサーチで彼女のもとで博士論文を書いた者ならではの仕事といえよう。

本書にはアレントについての今まで知られていなかった、彼女自身が語ろうとしなかったような事実も記載されている。ヤング＝ブリュエールの意図は事実を克明に報告することにあり、その点で本書が成功を収めていることは疑いない。特に興味深いのは、アレントと同時代の哲学者、文学者との交流、および彼女が現代の政治的出来事にどのような態度をとったかということである。それゆえ、本書の資料的側面に注目して、彼女の人となりの一端を紹介しておきたい。

アレントの幼少期の隠された事実は、父の病気にまつわる話であり、そのことを彼女はごく僅かな人にしか語らなかったし、彼女が自分の悲しみを詩に表現していたことを知っていた人はほとんどいない。ハンナ・アレントは、一九〇六年一〇月ハノーファー郊外のリンデンで教養あるユダヤ人家庭の一人娘として生まれた。父パウル・アレントは、電気技師で若い頃性病（シフィリス）にかかり、発熱療法で治療していた。母マルタはそのことを知って彼と結婚し、ハンナを生んだ。一家は、彼女が二歳半のときまで平穏で、皆充ち足りた生活を送った。ハンナにとって忘れることのできないのは、祖父マックス・アレントの存在であろう。祖父は彼女をよく散歩に連れていってくれたし、彼女に物語りの楽しみを教えてくれた。家のなかには活気が溢れ、気品が漂っていたが、このような明るい日々を突如として変えるのは、父の病気の再発であった。そのため父は仕事を辞めざるを得なくなり、一家はケーニヒスベルクに移った。病気は徐々に悪化し、第三期症状が現れ、一九一一年には父はケーニヒスベルク大学の診療所に収容された。まだ幼なかったハンナは父の病気の進行を見ながら過ごした。彼女は父に対して親切で忍耐強かった。彼女は、父の身体の腐食がひどくなり、見分けることができなくなるまで定期的に父を見舞った。一九一三年三月に祖父が死に、同年一〇月には父が死んだ。

父の病気が母と子の精神生活に暗い翳を落としたことは、想像に難くない。マルタは、娘が病気になったり、熱を出したりすると、内因性によるのではないかと心配した。一方ハンナの内面には「いたましい、裏切られた青春」というルサンチマンが抱かれ、信頼の喪失という癒しがたい傷を負った。しかしそれにもかかわらず、二人がパウルの想い出を大切にし、結婚記念日には連れだって会食し、祝ったという話は印象的である。マルタが生きている間はずっと、彼女が一九二〇年にマルティン・ヴィーバルトと結婚してからもそうであり、ハンナは母の夫に対する「見棄てることのない」愛に従った。

ハンナはケーニヒスベルクの自由な雰囲気のなかで独立した人格をもつように育てられた。当時ユダヤ人子弟は学校にいるときや遊んでいるとき反ユダヤ主義に苦しめられたが、彼女は母から「自分を辱しめてはいけない」といわれ、教師が反ユダヤ主義的なことをいったら家に帰ってきなさいと教えられていた。彼女は、ケーニヒスベルクの女子ギムナジウム、ルウィー

ゼシューレに在籍していたとき、ある若い教師に侮辱され、級友たちをその教師の授業のボイコットに誘い、その結果退学になった。彼女は、親類やその友人らの援助でベルリン大学の講義を聴講するかたわらアビトゥアを取得する準備をし、通常より一年早く試験に合格し、凱旋するかのように母校を訪れたという。

このことからも窺えるように、アレントは知的にきわめて早熟で、彼女の知的な力は若い仲間たちを圧倒していた。モーゼス・メンデルスゾーンの子孫で、アレントの生涯にわたる友となるアンネ・メンデルスゾーンが回想しているように、「彼女は〈すべて〉を読んでいた。この〈すべて〉のなかには哲学、詩――特にゲーテ、非常に多くのドイツやフランスの恋愛小説、学校当局から若者向きでないと指定された現代小説（トーマス・マンの小説も含む）がはいっていた」(p.32)。彼女は、一四歳のときすでにカントとヤスパースを読み、ギリシャ語の詩に親しんでいた。また、一七歳のときにはキルケゴールに紹介され、彼の著作を愛読し、いかなる教条主義にも反対するようになった。「なぜなら彼女がキリスト教徒ではなかったからではなく、教条主義はキルケゴール的ではなかったからである」(p.36)。アレントの知的欲求はすさまじく、知り合いになった人の書いたものをすべて読む性向はすでにこのころからのものである。

アレントが大学生活を送った一九二四―二九年は、ワイマール共和国が最も安定していた時期である。マールブルク大学でアレントは、フッサールとハイデガーの教えを受けたが、ハイデガーとの出会いは特別の意味をもった。ハイデガーは当時三十代半ばで最も脂が乗った時期で、アレントの出席したゼミや講義で『存在と時間』の大綱が形作られていった。「哲学が彼女の初恋だったが、それはマルティン・ハイデガー本人に受体化された哲学であった」(p.46)。しかし彼女にとってハイデガーは、たんに教師であるのみならず、恋の対象だった。アレントとハイデガーの間で交わされた書簡が公表されていないので、ヤング＝ブリュエールもその詳細はつかんではいないが、二人の間にロマンスがあったことは、多くの証言、彼女が彼に書き送った詩から明らかだという。もとより彼には妻と二人の子供がい、彼が人生のコースを変えようとしなかったことはたしかだが。

ハイデガーは、当時はまだ交友のあったヤスパースにアレントの指導を頼んだ。ハイデルベルク大学でのヤスパースとの出会いは、彼女にとってこの上もない幸運であった。ユダヤ女性を妻とするヤスパースは、アレントの個人的状況をよく理解できたし、人格的にも優れた人間だった。また、ハイデガーの場合もそうだったように、アレントが来たときヤスパースは最も精力的に研究を行っている時期で、三巻本の『哲学』を準備していた。彼女は、ヤスパースのもとで一九二八年に『アウグスティヌスにおける愛の概念』という博士論文を書いている。

ハイデルベルクでアレントは、同じユダヤ人のハンス・ヨナス、クルト・ブルーメンフェルトと知り合い、その友人になっ

た。ブルーメンフェルトは、ドイツ・シオニスト機構のチーフ・スポークスマンであり、彼女の眼をユダヤ人問題に開かせた。彼のレクチュアは彼女をシオニストに変えなかったが、彼の友人に変えた。「ブルーメンフェルトとハンナ・アレントは、腕を組んで、歌を歌い、詩を詠じ、大きな声で笑い、ヨナスは彼らにつき従った」(p.71)。アレントがユダヤ人としての自覚を強めていくのは、これらユダヤ人の友人を通じてである。

一九二九年にベルリンでアレントは、かつてハイデガーのゼミに同席していたギュンター・シュテルンと再会し、同棲ののち結婚している。シュテルンは、高名な心理学者夫妻の子で、ユダヤ人であり、音楽哲学についての教授資格論文を書こうとしていた。一方、アレントは、奨学金を得てドイツ・ロマン主義の研究を行っていた。彼女の関心は、反ユダヤ主義の高まりを背景にして次第に「同化」の問題に向けられていた。彼女は、リルケの『ドゥイノの悲歌』、啓蒙主義とユダヤ人問題、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』などについての論文を発表する一方、ロマン主義時代のユダヤ女性ラーヘル・ファルンハーゲンの伝記の執筆にほとんどのエネルギーを注いだ。一九三三年までに終りの二章を除いて書き上げられていた『ラーヘル・ファルンハーゲン』ではラーヘルの同化の試みは初めから失敗を運命づけられていたかのように描かれている。ヤング＝ブリュエールのように、いくつもの恋物語が織り込まれたラーヘル伝がアレントの「自伝としての伝記」だったと断定することには疑問があるが、彼女が同じような境遇にいたユダヤ女性に親近感を抱いていたことは確かだと思う。また、ラーヘルが最後に辿りつく「ユダヤ人であることを肯定する」というハイネの立場が当時のアレントの態度に反映されていたことも明らかである。

当時の知識人の多くは、政治を重荷だと考え、現実感覚を喪失していた。哲学者たちは現実世界から思考世界に逃避していた。彼らは、たやすく「民族的高揚」に身を委ねてしまいがちだった。アレントも政治から距離を置いていたが、ヒトラーの政権掌握を危惧し、反ユダヤ主義の高揚を感じ取っていた。そして、ナチスの抬頭とともに自分の周りの哲学者、文学者がナチズムに同質化していった事実こそ、彼女にとって脅威だったし、彼女を哲学から引き離したものである。

一九三三年二月二七日の国会放火事件を契機としてアレントは、実践活動にはいっていった。夫のシュテルンは共産主義者との関連で逮捕されるのを恐れパリに逃れたのに、アレントがベルリンに留まったのは、彼女自身のことばでいえば、「私はもはや傍観しているだけではすまされないと思った」からである。アレントがベルリンで行ったことは、二つあった。ひとつは、彼女のアパートの部屋をナチスから逃れて来た人びと(その大半は共産党員)の基地として提供したことである。彼女は共産主義に対する立場如何にかかわりなくそうしたのであり、彼女がそ

の政治理論的立場の違いにもかかわずレイモン・アロンに終生高い尊敬の念をもったのは、彼がベルリンにいたとき亡命者を助けたからだという。もうひとつは、ブルーメンフェルトからの依頼でプロイセン州立図書館で反ユダヤ主義に関する資料を集めることであった。彼女がそのような依頼を受けたのは、彼女はシオニスト機構にはいっておらず、もし彼女が逮捕されても機構は大きな打撃を受けないからである。危険な仕事だったが、彼女はそれを「本当に喜んで」引き受け、数週間後そのことによりゲシュタポに捕えられ、尋問を受けた。しかし、善良な警官がいたため、彼女は難を逃れ、八日間勾留されただけで釈放された。

一九三三年秋アレントは、母と旅券なしでパリに逃れた。なぜならそこには亡命中のシオニストが沢山集まっていたからである。彼女はパリでシュテルンと再会し、一緒に暮らすが、それは便宜的必要からであり、愛はもはや消え去っていたという。ともあれ彼らは、ベルトルト・ブレヒトや、シュテルンの遠い従兄弟にあたるヴァルター・ベンヤミンらと親交をもつ一方、アロンの紹介でアレクサンドル・コジェヴのヘーゲルに関するセミナーに出席した。彼女は、この一冊の本も書かず哲学教授にもなりたがらなかった反アカデミック的な人物に感動したが、同席していたサルトルと親しくなることはなかった。

一九三六年早春アレントは、ベルリン出身のハインリヒ・ブリュヒャーと知り合った。ブリュヒャーは、以前共産党員だったし、スパルタクス団の蜂起にも参加したことのある活動的な男だった。彼女は、この自分とは全く違った世界の人間と親しくなり、シュテルンと別れたのち、一九四〇年一月には正式に結婚している。これは、一九七〇年にブリュヒャーが死ぬまで続く幸せな結婚となった。しかしそれだけではなく、「ハインリヒ・ブリュヒャーを師として彼女は、マルクス、レーニン、トロッキーについての予備的読書に〈革命的実践（プラクシス）〉の感情をつけ加えた。ブリュヒャー ―― 大学人でなくプロレタリア、理論家でなく活動家、ユダヤ人でなく思考が一種の宗教となっている人間 ―― は、ハンナ・アレントにとっての新世界だった」(p.124)。アレントが、自発的に形成された、地域や職場に基礎を置く評議会制度のイメージをつかみとるのも、のちの政治的著作の中心的イデーを学びとるのも、ブリュヒャーとの議論からである。特に『全体主義の起原』についていえるのだが、ブリュヒャーは妻のよき理解者であり、知的協力者だった。彼は次第に共産主義的信条を棄て、マルクス主義の教義を批判するようになったが、アレントの関心を政治的現実に固定するのに充分な存在だった。「ハンナ・アレントの政治的行為への関心は、彼女がすぐれて政治的動物であるハインリヒ・ブリュヒャーと出会い、結婚していなかったら、あれほど深くはなっていなかっただろう」(p.xi) といわれるように、彼は彼女の政治思想の隠れた源泉となった。

一九三三年から四〇年にかけてアレントはパリでユダヤ人と

しての抵抗を行っている。彼女は、ユース・アリヤというシオニスト組織の事務局の責任者として働いた。ユース・アリヤとは、ヨーロッパ全土から逃れて来たユダヤ人子弟をパレスチナに移住させたり、入植後の仕事の訓練をする機関である。アレントがシオニズム運動に加わったのは、実際的・政治的な理由からであり、文化的・宗教的な理由からではない。彼女は、ユダヤ民族が住む場所が必要だと考えたのであり、決してユダヤ人の国民国家を望んでいたわけではない。彼女は、キブツに対しても批判的な感想を抱いていた。一九四〇年五月には、ドイツから来た、一七―五五歳のすべての男性、同年齢階層の未婚および子供のいない既婚のすべての女性に対する通告により、アレントはグールの収容所に入れられた。数週間後フランスが敗れ、その後の混乱に乗じて彼女は解放証書を手に入れ、そこを出ることができた。一九四〇年一〇月にユダヤ人登録の命令が出されると、身の危険を感じたアレントとブリュヒャーは、アメリカに渡る決心をした。友人の協力、アメリカにいるアレントの前の夫シュテルンの尽力によりアメリカの緊急ビザが確保されると、彼らは一九四一年一月にフランスをあとにし、リスボンからアメリカに渡った。

一九四一年五月アレントとブリュヒャーはニューヨークに着き、しばらくしてマルタ・アレントも彼らのもとに来た。アレントは、シオニズムの大義のために働きたいと思っていたが、同年秋ドイツ系ユダヤ人団体発行の新聞『アウフバウ』のコラムニストになり、コダヤ人問題についての論陣をはった。当初彼女は、ユダヤ軍創設の訴えかけを行っていたが、ユダヤ軍創設委員会がテロリストの前衛となると、それを紙上で非難した。また彼女は、一九四二年のビルトモア会議に出席したが、ベン・グリオンのユダヤ人国家創設の要求を受け入れる気にはならなかったし、ヘブライ大学のイェフーダ・マグネスのアラブ連邦内の二民族国家創設という立場を支持することもできなかった。彼女が望んだのは独立したユダヤ人社会、アラブ人社会相互の連合体としての国家建設だが、彼女はシオニスト内部で孤立し、影響力をあまり及ぼせなかった。

一九四三年初めに知ったアウシュヴィッツのニュースは、アレントの心に測り知れない衝撃を与えた。彼女がショックを受けたのは犠牲者の数ではなく、彼女が「死体の製造」と形容したユダヤ人大量殺害の方法である。アレントの大著『全体主義の起原』は、何よりもまずこのようなことがなぜ起こりえたのかを解明する試みだった。第一部「反ユダヤ主義」と第二部「帝国主義」の大部分は一九四六年以前に書かれたが、第三部「全体主義」は一九四七―四八年に書かれた。第三部で彼女がナチズムとスターリニズムを同じように全体主義として扱っているのは、彼女は四七年にソヴェトの強制収容所についての報告を読み、「全体主義的統治形態をほかのすべての統治形態から根本的に分かつのは強制収容所だという結論に達した」(p.204)からである。

一九五一年にアレントは、アメリカの市民権をえている。マルタ・アレントは一九四八年に死んだが、アレントとブリュヒャーは次第に生活の基盤を形成していった。アレントは執筆活動を生活の中心とし、ブリュヒャーはバード・カレッジの哲学の教師になった。また、イデオロギーに染まっていない知識人の開かれた態度は彼らの気に入り、彼らはメアリー・マッカーシーら多くの友人を得た。

『全体主義の起原』執筆後、アレントは、「マルクス主義の全体主義的要素」に関する研究に取りかかった。彼女は、『全体主義の起原』の最も重大なギャップはボルシェヴィズムのイデオロギー的背景についての適切な歴史的・概念的分析が欠けていることにある」(p.276)と考え、それを補うつもりだった。しかし彼女は、一年もたたずにその計画の狭隘さを悟り、人間の行為形態の研究へと関心を移行させた。したがって一九五二―五六年の著作はマルクス主義研究の副産物だし、五六年のシカゴ大学での講義をもとにして書かれたのが『人間の条件』である。

アレントは、世界情勢、アメリカ社会の様々な問題に対して関心を絶やさなかった。彼女はいくつもの論争的な著作を著したが、その最たるものは『イェルサレムのアイヒマン』だった。一九六〇年、アルゼンチンでアイヒマンが捕えられ、イェルサレムで裁判にかけられることになると、アレントは自分から申し出て『ニューヨーカー』誌のレポーターになった。彼女が講義をキャンセルしてまでアイヒマン裁判を傍聴しようとしたのは、ニュールンベルク裁判を逃しているので、これがナチス指導者を「生きたまま」見る最後のチャンスであり、「私が自分の過去に負っている義務」だと考えたからである。『ニューヨーカー』誌に掲載され、一九六三年に本になった彼女の裁判報告は、特にユダヤ人知識人から非難・中傷を浴びせられた。批判は、主として彼女がユダヤ人評議会のナチスへの協力を書き記したくだりに向けられた。彼女がそうしたのは、裁判においてその問題が意図的に避けられていると感じ取ったからである。「アレントがいかなるところにおいてもユダヤ民族の行動を全体として批判したことはない」(p.343)ということは事実だが、彼女はユダヤ人友人まで敵に回すことになってしまった。死の床にあったブルーメンフェルトは、直接読んだわけではないが、その著作について伝え聞き、憤激した。しかしヤスパースとの交友はこれを機に深められたし、夫のブリュヒャーや親友のメアリー・マッカーシーがその意義を正しく理解してくれたことは彼女にとって慰めだった。

一九六二年のキューバ危機に対しアレントは、ケネディ大統領の対処の仕方を支持したものの、それはアメリカの中南米諸国に対する反革命政策によって惹き起こされたと、その対外政策に対して批判的であった。六〇年代後半に泥沼化するヴェトナムへの介入に対して、彼女はそれを「帝国主義的」と判断した。彼女が危惧したのは、アメリカが自国の建国の歴史を忘れ、

第三世界の民衆が建国の努力をしているのに敵対している点である。そのような状況を背景に、彼女が自分を受け入れてくれた国アメリカの政治的伝統に対する積極的な評価を打ち出したのが『革命について』である。そのなかで彼女は、革命を「自由の創設」と意味づけ、「自由を守るのは立憲共和制であると結論づけた」(p.402)。特に第六章「革命的伝統とその失われた宝」は魅惑的な章で、パリ・コミューン、ロシア、ハンガリーの革命の過程で自然発生的に現れた評議会制度について物語られている。六〇年代中頃から終りにかけて学生運動家たちに読まれ、ブリュヒャーが彼女の「最良の書」と評価したのもそのためであろう。たしかに『革命について』は「政治的寓話」であり、彼女の視点から革命の歴史を再構成したものである。

一九六九年にヤスパース、七〇年には夫のブリュヒャーが死に、アレントは再び彼女の古巣である哲学に戻っていった。「彼女は、哲学の〈自由な空気〉を求めていたのである」(p.438)。一九七〇年代のアレントは、ニュースクールで教鞭をとるかたわら、彼女の遺稿となる『精神生活』の執筆に従事した。『精神生活』において彼女が解明しようとしたことは二つあった。ひとつは『人間の条件』で人間の政治的営みとして明確化した活動と精神諸能力とのつながりを明らかにすることであり、もうひとつはアイヒマン裁判の傍聴以来彼女の関心を惹いた思考と行為との関連、すなわち思考は善悪を区別する力と関連があるかという問題を考察することであった。一九七五年一二月四日アレントが心臓発作によって死んだとき、第一巻の「思考」、第二巻の「意志」が完成しており、一九七八年メアリー・マッカーシーの編集によってそれらは第三巻「判断力」に代わるものとしての「カントの政治哲学についての講義の抜粋」を付けて出版された。

以上、ヤング＝ブリュエールの五百ページを超えるアレント伝に依拠して、簡単に彼女の生涯を跡づけてきた。ハンス・ヨナスがアレントの葬儀で「あなたの暖かさがなくなり世界は冷たくなった」(p.469)といったことはうなずけるし、ヤング＝ブリュエールがアレントの実存的情熱を世界への愛(amor mundi)に求めたのは適切だと思う。というのも、彼女がたんに私的生活において友人に囲まれていただけでなく、世界の状況を憂慮していたことが本書から確認できるからである。彼女が、非政治的人間であることを自覚していたにもかかわらず、一九三三年に傍観していることはできなくなり、政治に関わっていったことは、感動的ですらある。

また、アレントが人間の経験的次元に基づいて思考するという点で一貫していたことも本書から確認することができる。ヤング＝ブリュエールがアレントの政治的諸著作執筆のいきさつを明らかにしているように、それらは普遍的な人間の経験のレベルで現代の政治的出来事の意味を解明する試みだったといえよう。アレントが現実世界につねに関心を抱き、自らの思想を

歴史的、哲学的な分析を通して表現したことはたしかだが、ただ彼女の思想的核心が何を契機にして形成されたのかということは本書では解明されていない。いかなる思想もなんらかの個人的確信に基づいて展開されるはずだし、かかる個人的確信の源泉を探究することは伝記的研究の重要な課題であるに違いない。アレントの政治思想形成のダイナミズムの解明は残念ながらあとに残された仕事といわねばならないが、本書がヴィヴィドな情報提供という意味でたんに政治思想に関心をもつ者だけでなく政治学、文学、哲学に関心を寄せる者にとっても一読の価値があることは疑うべくもない。

訂正のお願い

本誌五七巻二号に、誤植がありましたので貼付訂正していただきたくお願い申し上げます。

○一一一頁上段本文　六及び七行目

しんだのである。かれは、われわれのすべてが達成すべきことを達成した。すなわち、かれはかれの本拠をこの世界のなかに

○一一九頁上段本文末尾

価値があることは疑うべくもない。

寺島　俊穂